第三講 「心情」を読む　30分

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

残暑の夕日が(ア)一しきり夏の盛よりも烈しく、ひろびろした河面一帯に燃え立ち、殊更に大学の艇庫の真白なペンキ塗の板目に反映していたが、

I

長吉は先刻から一人ぼんやりして、或時は今戸橋(注1)の欄干に凭れたり、或時は岸の石垣から渡場の桟橋へ下りて見たりして、夕日から黄昏、黄昏から夜になる河の景色を眺めていた。今夜暗くなって人の顔がよくは見えない時分になったら今戸橋の上でお糸と逢う約束をしたからである。しかし丁度日曜日に当って夜学校を口実にも出来ない処から夕飯を済すが否やまだ日の落ちぬ中ふいと家を出てしまった。

一しきり渡場へ急ぐ人の往来も今では殆ど絶え、橋の下に夜泊りする荷船の燈火が慶養寺(注2)の高い木立を倒に映した山谷堀(注3)の水に美しく流れた。門口に柳のある新しい二階家からは三味線が聞えて、水に添う低い小家の格子戸外には裸体の亭主が涼みに出はじめた。長吉はもう来る時分であろ

うと思って一心(いっしん)に橋向うを眺めた。

(イ)最初に橋を渡って来た人影は黒い麻の僧衣(ころも)を着た坊主であった。つづいて(注4)尻端折(しりはしおり)の股引(ももひき)にゴム靴をはいた(注5)請負師(うけおいし)らしい男の通った後(あと)、暫(しばら)くしてから、蝙蝠傘(こうもりがさ)と小包を提げた貧し気な女房が(注6)日和下駄(ひよりげた)で色気(け)もなく砂を蹴立(た)てて大股(おおまた)に歩いて行った。もういくら待っても人通りはない。長吉は詮方(せんかた)なく疲れた眼を河の方に移した。河面(かわづら)は先刻(さっき)よりも一体に明(あか)くなり気味悪い雲の峯は影もなく消えている。長吉はその時(注7)長命寺(ちょうめいじ)辺(へん)の堤の上の木立から、(注8)他分(たぶん)旧暦七月の満月であろう、赤味を帯びた大きな月の昇りかけているのを認めた。空は鏡のように明(あか)るいのでそれを遮(さえぎ)る堤と木立はますます黒く、星は宵の明星の唯(たっ)た一つ見えるばかりでその他(た)は尽(ことごと)く余りに明い空の光に掻き消され、横ざまに長く棚曳(たなび)く雲のちぎれが銀色に透通(すきとお)って輝いている。見る見る中(うち)満月が木立を離れるに従い河岸(かわぎし)の夜露をあびた瓦(かわら)屋根や、水に湿(ぬ)れた棒杭(ぼうぐい)、満潮に流れ寄る石垣下の藻草(もぐさ)のちぎれ、船の横腹、竹竿(たけざお)なぞが、逸早(いちはや)く月の光を受けて蒼(あお)く輝き出した。忽ち長吉は自分の影が橋板の上に段々に濃く描き出されるのを知った。通りかかる(注9)ホーカイ節(ぶし)の男女が二人、「まア御覧よ。お月様。」といって暫(しばら)く立止った後(のち)、山谷堀の岸辺(きしべ)に曲るが否や当付(あてつけ)がましく、

〽書生さん橋の欄干(らんかん)に腰打(うち)かけて——

と立ちつづく小家（こいえ）の前で歌ったが金にならないと見たか歌いも了（おわ）らず、元の急足（いそぎあし）（注10）で吉原土手（よしわらどて）の方へ行ってしまった。

　長吉はいつも忍会（しのびあい）の恋人が経験するさまざまの懸念（けねん）と待ちあぐむ心のいらだちの外（ほか）に、何とも知れぬ一種の悲哀を感じた。お糸と自分との行末……行末というよりも今夜会って後（のち）の明日（あした）はどうなるのであろう。お糸は今夜兼（かね）てから話のしてある葭町（よしちょう）（注11）の芸者屋（げいしゃや）まで出掛けて相談をして来るという事で、その道中（どうちゅう）をば二人一緒に話しながら歩こうと約束したのである。お糸がいよいよ芸者になってしまえばこれまでのように毎日逢（あ）う事ができなくなるのみならず、それが万事の終りであるらしく思われてならない。自分の知らない如何（いか）にも遠い国へと再び帰る事なく去（い）ってしまうような気がしてならないのだ。今夜のお月様は忘れられない。一生に二度見られない月だなアと長吉はしみじみ思った。あらゆる記憶の数々が電光のように閃（ひらめ）く。最初地方町（じかたまち）の小学校へ行く頃は毎日のように喧嘩（けんか）して遊んだ。やがては皆（みん）なから近所の板塀（いたべい）や土蔵の壁に相々傘（あいあいがさ）をかかれて囃（はや）された。小梅（注12）の伯父さんにつれられて奥山（注13）の見世物（みせもの）を見に行ったり池の鯉（こい）に麩（ふ）をやったりした。

　三社祭（さんじゃまつり）（注14）の折お糸は或年踊屋台（おどりやたい）へ出て道成寺（どうじょうじ）（注15）を踊った。町内一同で毎（まい）年汐干狩（としおひがり）に行く船の上でもお糸はよく踊った。学校の帰り道には毎日のよ

うに（注16）待乳山（まつちやま）の境内（けいだい）で待合せて、人の知らない（注17）山谷（さんや）の裏町から吉原田圃（よしわらたんぼ）を歩いた……。ああ、お糸は何故（なぜ）芸者なんぞになるんだろう。芸者なんぞになっちゃいけないと引止めたい。長吉は無理にも引止めねばならぬと決心したが、すぐその傍（そば）から、自分はお糸に対しては到底それだけの［Ⅱ］のない事を思返（おもいかえ）した。果敢（はかな）い絶望と諦（あきら）めとを感じた。お糸は二ツ年下の十六であるが、この頃になっては長吉は殊更（ことさら）に日一日とお糸が遥（はる）か年上の姉であるような心持がしてならぬのであった。いや最初からお糸は長吉よりも強かった。長吉よりも遥（はるか）に臆病（おくびょう）ではなかった。お糸長吉と相々傘にかかれて皆なから囃（はや）された時でもお糸はびくともしなかった。平気な顔で長（ちょう）ちゃんはあたいの旦那（だんな）だよと怒鳴（どな）った。去年初めて学校からの帰り道を待乳山で待ち合わそうと申出（もうしだ）したのもお糸であった。（注18）宮戸座（みやとざ）の立見（たちみ）へ行こうといったのもお糸が先であった。帰りの晩（おそ）くなる事をもお糸の方がかえって心配しなかった。知らない道に迷っても、お糸は行ける処まで行って御覧よ。巡査（おまわり）さんにきけば分るよといって、かえって面白そうにずんずん歩いた……。

あたりを構わず橋板の上に（注19）吾妻下駄（あずまげた）を鳴（なら）す響（ひびき）がして、小走りに突然お糸がかけ寄った。

「おそかったでしょう。気に入らないんだもの、母（おっか）さんの結（ゆ）った髪なん

ぞ。」と駆(か)け出したために殊更(ことさら)ほつれた鬢(びん)を直しながら、「おかしいでしょう。」

(ウ)長吉はただ眼を円くしてお糸の顔を見るばかりである。いつもと変りのない元気のいいはしゃぎ切った様子がこの場合むしろ憎らしく思われた。遠い下町(したまち)に行って芸者になってしまうのが少しも悲しくないのかと長吉はいいたい事も胸一ぱいになって口には出ない。お糸は河水(かわみず)を照(て)らす玉のような月の光にも一向(いっこう)気のつかない様子で、

「早く行こうよ。私(わたい)お金持ちだよ。今夜は。(注20)仲店(なかみせ)でお土産を買って行くんだから。」とすたすた歩きだす。

「明日(あした)、きっと帰るか。」長吉は吃(ども)るようにしていい切った。

「明日帰らなければ、明後日(あさって)の朝はきっと帰って来てよ。不断着だの、いろんなもの持って行かなくっちゃならないから。」

待乳山の麓(ふもと)を(注21)聖天町(しょうでんちょう)の方へ出ようと細い路地(ろじ)をぬけた。

「何故(なぜ)黙ってるのよ。どうしたの。」

「明後日(あさって)帰って来てそれからまたあっちへ去(い)ってしまうんだろう。え。お糸ちゃんはもうそれなり向うの人になっちまうんだろう。もう僕とは会えないんだろう。」

「ちょいちょい遊びに帰って来るわ。だけれど、私(わたい)も一生懸命にお稽古(けいこ)

しなくっちゃならないんだもの。」

少しは声を曇したもののその調子は長吉の満足するほどの悲(エ)シュウを帯びてはいなかった。長吉は暫くしてからまた突然に、

「なぜ芸者なんぞになるんだ。」

「Ⅲ」

お糸は已に長吉のよく知っている事情をば再びくどくどしく繰返した。お糸が芸者になるという事は二、三年いやもっと前から長吉にも能く分っていた事である。その起因は大工であったお糸の父親がまだ生きていた頃から母親は手内職にと針仕事をしていたが、その得意先の一軒で(注22)橋場の妾宅にいる(注23)御新造がお糸の姿を見て是非娘分にして行末は立派な芸者にしたてたいといい出した事からである。御新造の実家は葭町で幅のきく芸者家であった。しかしその頃のお糸の家はさほどに困ってもいなかったし、第一に可愛い盛の子供を手放すのが辛かったので、親の手元でせいぜい芸を仕込ます事になった。その後父親が死んだ折には差当り頼りのない母親は橋場の御新造の世話で今の煎餅屋を出したような関係もあり、万事が金銭上の義理ばかりでなくて相方の好意から自然とお糸は葭町へ行くように誰れが強いるともなく決っていたのである。百も承知しているこんな事情を長吉はお糸の口からきくために質問したのでない。お糸がどうせ

行かねばならぬものなら、もう少し悲しく自分のために別(わかれ)を惜しむような調子を見せてもらいたいと思ったからだ。長吉は自分とお糸の間にはいつの間(ま)にか互(たがい)に疎通しない(オ)感情の相違の生じている事を明(あきら)かに知って、更に深い悲(かなし)みを感じた。

　この悲みはお糸が土産物を買うため仁王門(におうもん)を過ぎて仲店(なかみせ)へ出た時更にまた堪えがたいものとなった。夕涼(ゆうすずみ)に出掛ける賑(にぎや)かな人出の中にお糸はふいと立止って、並んで歩く長吉の袖(そで)を引き、「長さん、あたいも直(じ)きあんな扮装(なり)するんだねえ。(注24)絽縮緬(ろちりめん)だねきっと、あの羽織……。」

　長吉はいわれるままに見返ると、(注25)島田に結(ゆ)った芸者と、それに連立(つれだ)って行くのは黒絽(くろろ)の紋付をきた立派な紳士であった。ああお糸が芸者になったら一緒に手を引いて歩く人はやっぱりああいう立派な紳士であろう。自分は何年たったらあんな紳士になれるのか知ら。(注26)兵児帯(へこおび)一ツの現在(いま)の書生姿がいうにいわれず情なく思われると同時に、長吉はその将来どころか現在においても、已(すで)に単純なお糸の友達たる資格さえないもののような心持がした。

　いよいよ(注27)御神燈(ごしんとう)のつづいた葭町の路地口(ろじぐち)へ来た時、長吉はもうこれ以上果敢(はかな)いとか悲しいとか思う元気さえなくなって、唯(た)だぼんやり、狭く暗い路地裏のいやに奥深く行先知れず曲込(まがりこ)んでいるのを不思議そうに覗込(のぞきこ)む

ばかりであった。

「あの、一イ(ひ)二ウ(ふ)三イ(み)……四つ目の瓦斯燈(ガスとう)の出てるところだよ。松葉屋(まつばや)と書いてあるだろう。ね。あの家(うち)よ。」とお糸はしばしば橋場の御新造につれて来られたり、またはその用事で使いに来たりして能く知っている軒(のき)先(さき)の燈(あかり)を指し示した。

「じゃア僕は帰るよ。もう……。」というばかりで長吉はやはり立止っている。その袖をお糸は軽く捕(つかま)えて忽(たちま)ち媚(こび)るように寄添い、

「明日(あした)か明後日(あさって)、家(うち)へ帰って来た時きっと逢(あ)おうね。いいかい。きっとよ。約束してよ。あたいの家(うち)へお出(いで)よ。よくッて。」

「ああ。」

返事をきくと、お糸はそれですっかり安心したものの如くすたすた路地の溝板(どぶいた)を吾妻下駄(あずまげた)に踏みならし振返りもせずに行ってしまった。その足音が長吉の耳には急いで馳(か)けて行くように聞えた、かと思う間(ま)もなく、ちりんちりんと格子戸の鈴の音がした。長吉は覚えず後(あと)を追って路地内(ろじうち)へ這入(はい)ろうとしたが、同時に一番近くの格子戸が人声と共に開(あ)いて、細長い弓張(ゆみはり)（注28）提灯(ぢょうちん)を持った男が出て来たので、何(なん)という事なく長吉は気後(きおく)れのしたばかりか、顔を見られるのが厭(いや)さに、一散(いっさん)に通りの方へと遠(とおざ)かった。円い月は形が大分(だいぶ)小(ちい)さくなって光が蒼(あお)く澄んで、静(しずか)に聳(そび)える裏通りの倉の屋根

の上、星の多い空の真中(まんなか)に高く昇っていた。

（略）

学校はもう昨日(きのう)から始っている。朝早く母親の用意してくれる弁当箱を書物と一所(いっしょ)に包んで家(うち)を出て見たが、二日目三日目にはつくづく遠い神田(かんだ)まで歩いて行く気力がなくなった。今までは毎年(まいねん)長い夏休みの終る頃といえば学校の教場が何(なん)となく恋しく授業の開始する日が心待(こころまち)に待たれるようであった。そのういういしい心持はもう全く消えてしまった。つまらない。学問なんぞしたってつまるものか。学校は己(おの)れの望むような幸福を与える処ではない。……幸福とは無関係のものである事を長吉は物新しく感じた。

　四日目の朝いつものように七時前に家(うち)を出て(注29)観音(かんのん)の境内(けいだい)まで歩いて来たが、長吉はまるで疲れきった旅人(たびびと)が路傍(みちばた)の石に腰をかけるように、本堂の横手のベンチの上に腰を下(おろ)した。いつの間に掃除をしたものか朝露に湿った小砂利(こじゃり)の上には、投捨てた汚い紙片(かみきれ)もなく、朝早い境内はいつもの雑沓(ざっとう)に引かえて妙に広く神々(こうごう)しく寂(しん)としている。本堂の廊下には此処(ここ)で夜明(よあか)ししたらしい迂散(うさん)な男が今だに幾人も腰をかけていて、その中には垢(あか)じみた単衣(ひとえ)の三尺帯(さんじゃくおび)を解いて平気で褌(ふんどし)をしめ直している奴(やつ)もあった。この頃の空癖(そらくせ)で空は低く鼠色(ねずみいろ)に雲り、あたりの樹木からは虫噛(むしば)んだ青いままの

木葉が絶え間なく落ちる。烏や鶏の啼声鳩の羽音が爽かに力強く聞える。溢れる水に濡れた御手洗の石が飜える奉納の手拭のかげにもう何となく冷いように思われた。それにもかかわらず朝参りの男女は本堂の階段を上る前にいずれも手を洗うためにと立止まる。その人々の中に長吉は偶然にも若い一人の芸者が、口には桃色のハンケチを啣えて、（注30）一重羽織の袖口を濡すまいためか、真白な手先をば腕までも見せるように長くさし伸しているのを認めた。同時にすぐ隣のベンチに腰をかけている書生が二人、「見ろ見ろ、（注31）ジンゲルだ。わるくないなア。」といっているのさえ耳にした。

島田に結って弱々しく両肩の撫で下った小作りの姿と、口尻のしまった円顔、十六、七の同じような年頃とが、長吉をしてその瞬間危くベンチから飛び立たせようとしたほどお糸のことを連想せしめた。お糸は月のいいあの晩に約束した通り、その翌々日に、それからは長く葭町の人たるべく手荷物を取りに帰って来たが、その時長吉はまるで別の人のようにお糸の姿の変ってしまったのに驚いた。赤い（注32）メレンスの帯ばかり締めていた娘姿が、突然たった一日の間に、丁度今御手洗で手を洗っている若い芸者そのままの姿になってしまったのだ。薬指にはもう指環さえ穿めていた。用もないのに幾度となく帯の間から鏡入れや（注33）紙入を抜き出して、白粉をつけ直したり鬢のほつれを撫で上げたりする。戸外には車を待たして置いて

いかにも急（いそ）がしい大切な用件を身に帯びているといった風（ふう）で一時間もたつかたたない中（うち）に帰ってしまった。その帰りがけ長吉に残した最後の言葉はその母親の「御師匠（おししょう）さんのおばさん」にもよろしくいってくれという事であった。まだ何時（いつ）出るのか分らないからまた近い中に遊びに来るわという懐（なつか）しい声も聞（きか）れないのではなかったが、それはもう今までのあどけない約束ではなくて、世馴（よな）れた人の(カ)如才（じょさい）ない挨拶（あいさつ）としか長吉には聞取れなかった。娘であったお糸、幼馴染（おさななじみ）の恋人のお糸はこの世にはもう生きていないのだ。路傍（みちばた）に寝ている犬を驚（おどろ）かして勢よく駈（か）け去った車の後（あと）に、えもいわれず立迷った化粧の匂（にお）いが、いかに苦しく、いかに切（せつ）なく身中（みうち）にしみ渡ったであろう……。

（永井荷風『すみだ川』）

（注1）今戸橋……台東区浅草にあった橋。
（注2）慶養寺……台東区今戸にある曹洞宗の寺院。
（注3）山谷堀……隅田川から山谷にいたる掘割で、水路として活用されていた。現在は埋め立てられている。
（注4）尻端折……着物の裾をまくって帯に挟むこと。
（注5）請負師……土木や建築などの業務を請け負い、職人に割り振る仕

事の人。

（注6）日和下駄……主に晴天の日に履く歯の低い下駄。

（注7）長命寺……墨田区にある天台宗の寺院。

（注8）他分（たぶん）……多分。

（注9）ホーカイ節……法界屋と呼ばれる流しの芸人が、路上や門前で歌っていた曲。

（注10）吉原土手……隅田川の出水を防ぐために幕府が築いた日本堤の別称。

（注11）葭町……中央区の地名。現在の日本橋人形町。

（注12）小梅……現在の墨田区の一部の地名。

（注13）奥山……浅草寺本堂の北西一帯の通称。

（注14）三社祭……台東区浅草神社で毎年五月に行われる祭り。

（注15）道成寺……歌舞伎舞踊の一つである京鹿子娘道成寺のこと。

（注16）待乳山……台東区浅草にある丘。

（注17）山谷……台東区にあった地名。

（注18）宮戸座……浅草公園の裏にあった劇場で明治の終わりから大正にかけて人気があった。

（注19）吾妻下駄……台に畳表をつけた女性用の下駄。

（注20）仲店……仲見世。浅草寺参道にある商店街。
（注21）聖天町……浅草にあった町の名前。
（注22）橋場……台東区の町名。
（注23）御新造……他人の妻を敬っていう言葉。
（注24）絽縮緬……生糸で織られた薄手の織物。
（注25）島田……未婚女性や芸者などが結った髪型。
（注26）兵児帯……男性の普段着として使われる幅広の帯。
（注27）御神燈……芸者屋の入り口などにえんぎをかついで掲げた提灯。
（注28）弓張提灯……弓のように曲げた竹ひごを組んで作った提灯。
（注29）観音……聖観世音菩薩を祀る浅草寺。
（注30）一重羽織……裏地をつけていない夏用の羽織。
（注31）ジンゲル……当時の学生言葉で芸者のこと。
（注32）メレンス……主に女性の和服の地に使われる毛織物の一種。
（注33）紙入……紙幣などを入れて持ち歩く入れ物。

問一　傍線(ア)「一しきり」とほぼ同じ意味の言葉を、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

A　暫時　　B　速やかに　　C　痛烈に　　D　絶え間無く

E　突然

問二 空欄 I にはいる①から⑤の文章について、どのような順番に並べ直すべきか。時間の推移を意識して考え、次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

① 堤の上に長く横(よこた)わる葉桜の木立(こだち)は此方(こなた)の岸から望めば恐ろしいほど真暗(まっくら)になり、一時(いちじ)は面白いように引きつづいて動いていた荷船はいつの間にか一艘(いっそう)残らず上流の方へ消えてしまって、釣(つり)の帰りらしい小舟がところどころ木の葉のように浮いているばかり、見渡す隅田川(すみだがわ)は再びひろびろとしたばかりか静(しずか)に淋(さび)しくなった。

② 遥か川上(かわかみ)の空のはずれに夏の名残を示す雲の峰が立っていて細い稲妻が絶間(たえま)なく閃(ひら)めいては消える。

③ と見る間(ま)もなく初秋の黄昏(たそがれ)は幕の下(お)るように早く夜に変った。

④ 流れる水がいやに眩(まぶ)しくきらきら光り出して、渡船(わたしぶね)に乗っている人の形をくっきりと墨絵(すみえ)のように黒く染め出した。

⑤ 忽(たちま)ち燈(ともしび)の光の消えて行くようにあたりは全体に薄暗く灰色に変色して来て、満ち来る夕汐(ゆうしお)の上を滑って行く荷船(にぶね)の帆のみが真白く際(きわ)立(だ)った。

A ②—①—③—④—⑤
B ④—①—③—⑤—②
C ⑤—③—④—①—②

D　①―⑤―④―③―②

E　①―⑤―②―③―④

問三　傍線(イ)の部分から読み取れる長吉の態度や心情として、次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

A　こんなに人通りの激しい場所をお糸との待ち合わせに選んだことを後悔している。

B　さっきからみすぼらしい風体のものしか通りがからないので、なんとなくつまらなく感じている。

C　自分は早めにやって来たのに、約束の時刻をだいぶ過ぎても現れないお糸のいい加減さに呆れている。

D　なかなか来ないお糸を待ちかねて、薄暗い橋向こうの人影に目を凝らしている。

E　どうして人の顔が見えない時分を待ち合わせ時刻に指定したのか、お糸の気持ちを測りかねている。

問四 空欄 Ⅱ にはどのような語句がはいるか。次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

A 思考力　B 意志力　C 説得力　D 揚力

E 威力

問五 傍線(ウ)「長吉はただ眼を円くしてお糸の顔を見るばかり」だったのはどうしてか。次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

A 自分はお糸との行く末をくよくよ思い悩んでいたのに、お糸があまりに屈託がなかったから。

B お糸との想い出の数々に我を忘れていたときに、思いもよらずお糸が駆け寄ってきて意外だったから。

C いつものように元気で朗らかなお糸の様子があまりに魅力的で、思わず見とれてしまったから。

D お糸が気に入っていないらしい結い上げた髪もよく似合っていて、別段おかしいとは思わなかったから。

E 幼馴染として一緒によく遊んでいたお糸の今夜の様子がすっかり大人びていて、普段とは違うように思われたから。

問六　傍線㈤「シュウ」と同じ漢字を用いるものはどれか。次の中から一つ選び、記号で答えよ。

A　シュウ日野外で働く。
B　名人は勝つことにシュウ着していなかった。
C　決められたルートをシュウ回する。
D　前のやり方を踏シュウする。
E　思わずシュウ眉を開く。

問七　空欄［Ⅲ］にはどのような語句がはいるか。次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

A　本当はなりたいわけじゃないけど、仕方ないじゃない。
B　家族のことを思っていやいや行くんだよ。
C　小さい頃からなりたかった事は知ってる筈。
D　またそんな事きくの。おかしいよ。長さんは。
E　きっとお稽古は、辛いでしょうねえ。

問八　傍線(オ)「感情の相違」とはどのようなものか。次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

Ａ　長吉がお糸にも少しは別れを惜しむそぶりをして欲しいと思っているのに、お糸はめそめそした長吉の態度を疎ましいと思っている。

Ｂ　お糸が芸者になって自分の町を去ることを長吉は深く悲しんでいるのに、お糸は自分の境遇の変化を喜んでいる。

Ｃ　お糸が前向きな気持ちで新生活に向かおうとしているのに、長吉はお糸の将来を懸念している。

Ｄ　お糸が芸者というのは華やかで魅力的な職業だと思っているのに、長吉は卑しく恥ずかしい商売だと考えている。

Ｅ　お糸が芸者の華美な衣装や豊かな生活に憧れているのに対して、長吉はもっと堅実な生活にこそ価値があると考えている。

問九　傍線(カ)のように、長吉がお糸の言葉を「如才ない挨拶」としか聞き取れなかったのはなぜか。次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

Ａ　芸者として一人前になるまではそうそう遊びに来る余裕がないことは明らかなのに、調子のいいことを言っているから。

Ｂ　お糸の表情や口ぶりから、本気で遊びに来る気も、長吉に対する関心もないことを勘づいたから。

Ｃ　突然お糸が自分よりはるかに大人びて、要領よく世の中を渡っていける人間に変わってしまったように思えたから。

Ｄ　お糸が長吉よりも、自分の母である「お師匠さんのおばさん」の方を気にかけているのがわかったから。

Ｅ　まだ十六なのに着飾って化粧をしていたり、一時間経たないうちに早々に帰ってしまったりと、態度に軽薄なものが感じられたから。

問十　この文章から読み取れる長吉の性格や心情として適切でないものはどれか。次の中から一つ選び、記号で答えよ。

A　とても感じやすい反面、自分の感情に溺れてしまって、相手の立場にまで思い至らない幼さがある。

B　繊細で感受性が豊かだが、気が弱く人目を気にしがちであり、自分の気持ちを貫き通せないでいる。

C　芝居でもいいからお糸に悲しむふりをして欲しいと思うように、客観的な事実よりもその場の感情を重んじるところがある。

D　子供の頃の淡い恋愛関係を愛おしむあまり、成長していくお糸の姿に嫉妬と焦りを感じている。

E　世間知らずのお坊ちゃんのために、お糸の置かれた境遇を理解できず彼女の冷淡さに戸惑っている。

問十一　この文章から読み取れるお糸の性格や心情として、次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

Ａ　明るく物怖じしない性格だが、その場の気分や周囲の勧めに流されて、自分から考えようとしないところがある。

Ｂ　一見明るいお転婆娘のようだが、実のところ貧しさゆえ自分で未来を選べないことにやりきれない思いを抱えている。

Ｃ　長吉が自分に好意を持っている事は十分気がついているが、どうせ結ばれない身の上なので、あえて知らぬふりを装って、悲しみに耐えている。

Ｄ　気が強いところがありながら、親や親戚に頼まれると嫌とは言えないところがあり、長吉の気持ちもわかるだけに心苦しく思っている。

Ｅ　慎重で考慮深く、様々な条件を取捨選択しながら、情に流されることなく最善の道を選ぶ賢さがある。

問十二　この文章の表現技法上の特徴はどのようなものか。次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

A　無骨だが力強い文章で、隅田川べりの江戸情緒の残る風景や貧しいながらたくましく生活している庶民の姿を生き生きと描き出している。

B　奇想天外な表現を多用しつつ、物事に新たな照明を与えることで、まだ若い二人の心情を、意外な角度から照らし出している。

C　暮れてゆく水辺の街の情景や幼馴染と離別する主人公の悲しみやためらいを、流麗で格調高い文章で活写している。

D　簡潔だが隙のない分析的な文章であり、登場人物の心理を鋭利なメスのように見事に解剖してみせている。

E　句点の少ない長文が切れ目なく続くことで、独特のリズムを作り出し、長吉の心に渦巻く感情を力強く表現している。

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

第三講「心情」を読む　解答

問一	問二	問三	問四	問五	問六
A	C	D	E	A	E

問七	問八	問九	問十	問十一	問十二
D	B	C	E	A	C